「葛飾区少年の主張大会」が開催されました

令和６年11月16日、かつしかシンフォニーヒルズ・アイリスホールにおいて、応募総数341人の中から選ばれた小学生19人、中学生8人、計27人がそれぞれの主張を発表しました。結果は次のとおりです（敬称略）。

地域教育課　☎03-5654-8482

司会は昨年度中学生の部最優秀賞の田村優奏さん

小学生の部

最優秀賞

山口 珠生（北野小6年）
「『弱さ』は『個性』」

国本 世乃（よつぎ小5年）
「ぼくの『ルーツ』と『国せき』」

優 秀 賞

久西 陽（二上小6年）「差別と偏見」

山本 真生（小松南小6年）
「大切な自分イロ」

柿沼 美里（南奥戸小6年）
「障害者と過ごす日々」

松村 幸月（半田小6年）
「差別～『変』という言葉～」

市原 結輝（西亀有小6年）
「自然が教えてくれること」

入　　選

濵中 爽佳　（道上小6年）
石山 結那巴（新宿小6年）
上竹 蒼　（青戸小6年）
板垣 考倫　（細田小6年）
乾 智治　（末広小6年）
望月 明莉　（原田小6年）
渡邉 佑乃　（飯塚小6年）
中村 志　（清和小6年）
竹﨑 衣里　（川端小6年）
大橋 花実　（渋江小6年）
樫山 颯一　（綾南小6年）
千地 花緒里（上千葉小6年）

※同一賞内の順番はプログラム順

中学生の部

最優秀賞

ジャッド ジェシカ（水元中3年）
「ハーフの大冒険」

優 秀 賞

谷本 未來（新宿中2年）
「直筆のエネルギー」

海老 統太（青戸中２年）
「大好きな海のために」

入　　選

藤井 杏奈（新小岩中2年）
蜂谷 凜紗（奥戸中2年）
酒井 美子（一之台中3年）
馬上 結衣（双葉中2年）
陳 詩瞳　（四ツ木中2年）

中学生の部・最優秀賞

ハーフの大冒険

水元中学校　3年　ジャッド ジェシカ

ここから九千四百キロメートルほど離れた、羊で有名な島国、ニュージーランド。私は、この夏、日豪ハーフの十五歳として、出身地も年齢も違う日本人の中高生の仲間とともに、半月の短期留学に参加しました。

「ニュージーランドの日常生活を体験しよう。地元の人々と触れ合うことで、生きた国際交流を体験できます。」

この案内を両親と見たときには、飛び込んでみたい気持ち、そして、受験の夏に行っても大丈夫なのかという不安でいっぱいで、締切前日まで沢山悩みました。しかし、どっちを選んでも後悔するのなら、留学に参加したいという気持ちの方が強く、進路選択においても必要な経験だと思ったため、行く決意ができました。

たった半月にも関わらず、私には様々な「初体験」がありました。親元を離れての生活、フルイングリッシュの世界、小型飛行機の操縦、ライフル銃の射撃。消極的な私がこんなにも活発に活動できたのは、見知らぬ地で何者にだってなれる、そんな勇気が生まれたからだと考えます。

ホストファミリーとは、すぐに仲を深められましたが、現地の英語を理解するのが難しく、段々と会話できるようになったのを覚えています。夕食の場で語り合ったり、週末には、観光名所に連れて行ってくれたりと、新たな家族ができたようでした。

滞在中は、現地の公立高校に通いましたが、日本の学校生活とはまるで異なり、驚きの連続でした。まず、七十五分の授業が四つで一日が終わり、二時間目の後におやつタイムがあったこと。私に付き添ってくれた生徒は、日本語と演劇の授業に多く参加していて、生徒の流暢(りゅうちょう)な日本語、演技力や歌唱力に、私は毎日感動していました。学校初日には、先住民マオリの生徒からの歓迎があり、挨拶として鼻と鼻を合わせるというものがありました。みなさんは、この光景を想像できますか。日本人の思春期には刺激が強く、心臓が飛び出る思いでした。また、同年代の子達と話す時に、学校の美男美女の話だとすごく盛り上がるのは、全世界共通だとわかりました。

日本では、ハーフという存在は珍しいもので、その待遇には慣れていました。実際、ニュージーランドに行ってみると、ハーフである意味もなく、ただ普通の留学生として扱われ、新鮮な気持ちになったのを覚えています。また、日本語の授業で、「日本とオーストラリアのハーフです。」と自己紹介をした際に、現地の先生から、「ここでは、ハーフという差別用語が禁止されたから、ミックスのことをハーフと日本で呼ぶのはとても興味深いわ。」と言われました。私が通った高校は、先住民、アジア人、黒人、白人まで、様々な地域からの生徒が集まっており、何人だって関係ないというスタンスがありました。また、人種以外でも、障がい者や性的少数者を受け入れる心も広く、実際に、私の友達のグループには、車いす利用者や、女子でも本人の意志で「彼」と呼ばれている子もいました。

ひとりひとりが見た目やルーツ、偏見で良くも悪くも差別されず、普通の人間として評価される、私がニュージーランドに行って、一番印象に残ったことはそれです。

「将来の社会には、個性や多様性を追求していくことが必要だ。」去年この場で主張したその理想の世界を、肌で実感することができ、嬉しかったです。

私がこの留学に参加して得たものは、人との出会いや交流でした。日本各地から集結した仲間、違う環境で育ってきたホストファミリーや現地の生徒。みんな出会うはずのなかった遠い人ですが、身近に感じ、彼らから学ぶことがたくさんありました。このご縁を大切にしていく、これこそが、多様性を認め合う社会において必要なピースなのではないかと気付かされました。そして、ハーフではなく、わたし個人のジャッドジェシカとして、生きていくことが楽しみになった、“ハーフ“改め“わたし“の大冒険でした。